

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

第 124 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成13年 6 月21日

クロトウゾクカモメ



2000. 9. 17 厚真町浜厚真 撮影者 遠藤美浩

〒066-0015 千歳市青葉5-6-5



も く じ

私の探鳥地 (39) 『百合が原公園』	道場 優	2
花の湿原 霧多布	長岡 滋雄	3
北海道における繁殖期のハシボソガラスの分布	藤巻 裕蔵	5
マナヅル観察記録	佐藤 幸典	6
十勝地方での鳥見	高橋 良直	7
探鳥の思い出	大村 正道	9
平成13年度総会報告		10
与那国鳥探鳥旅行にて	片山 實・慶子	12
探鳥会ほうこく		12
探鳥会あんない		16
鳥民だより		16

— 百合が原公園 —

私の探鳥地 (39) 道場 優

約24ヘクタールの広大な敷地に、世界中から集められた百合が咲き誇り、札幌市の姉妹都市の庭園やロックガーデン、リリートレイン、温室などの施設がある百合が原公園。約80種の百合が咲く6月上旬～9月下旬には、たくさんの花を愛でる人々で賑わうこの公園も、探鳥の隠れた場所とは、あまり知られていない。事実、双眼鏡を首に鳥見をしているのは、私くらいなものだ。

1983年7月に開園する前は、ここは牛を飼い、乳を搾る農家の農場だった。広い畑が拡がり、牛の鳴き声があたりに響いて、のんびりした気分させられるところだった。近くのアパートに住んでいた私は、家内と朝、牛乳を買に行ったものだ。現在も縁あって公園の近くに居をかまえているが、サイロが残っているあたりが、農家の住居跡だ。

樹は天然のものは殆どなく、公園にすべく植え込まれたものだが、月日が経ってやっと林らしくなって来て、鳥たちも1年中住みつき、繁殖する鳥も増えてきた。また、夏鳥や冬鳥がこの公園を利用し、旅の途中で一休みする珍しい鳥たちにも出会える楽しみがある。

特別に鳥がみられるポイントはないが、公園の中を花を見ながら一周すると、ずいぶんたくさんの鳥と出会えたり、鳥の声を聴くことができる。池にはマガモやコガモの夫婦も見られる。強いて言えば「日本庭園」や「ロックガーデン」の小さな木々に珍しい鳥が見られて、私は楽しみな場所になっている。

平成4年から観ている鳥を紹介すると、留鳥は、スズメ、ハシボトガラス、ハシボソガラス、ハシボトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、エナガ(シマエナガ)、アカゲラ、コゲラ、キクイタダキ、キバシ

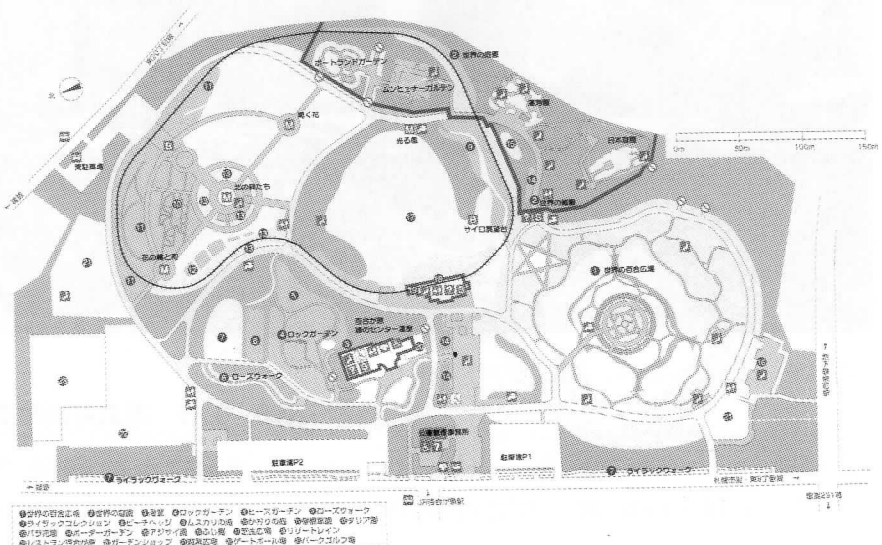
リ、ヒヨドリ、トビ、ハクセキレイ、キジ(コウライキジ)。加えて繁殖している鳥は、アカハラ、ムクドリ、アオジ、モズ、カワラヒワ、ヒバリ、コムクドリ、シメ、アリスイ、キジバト、以前にはチゴハヤブサが繁殖した。

他に、カッコウ、キビタキ、ルリビタキ、ノゴマ、オオルリ、コルリ、ウソ(ウソ、アカウソ)、クロツグミ、イスカ、ヤブサメ、コサメビタキ、ウグイス、センダイムシクイ、エゾセンニュウ、アトリ、ベニヒワ、ベニマシコ、メジロ、ノビタキ、イカル、カケス、ツグミ、アオサギ、ハイタカ、イソシギ、マガモ、コガモ、以上55種。

私の百合が原公園の探鳥も夏はお休みで、他のところへ出かけていることが多いので、まだまだこっそりと公園を利用している鳥がいるかと思われる。人間と共存する鳥たちの“声”にも耳をすませて、鳥たちの住みやすい自然とはどういうところかを考えるのも、いい機会かと思われる。

〒002-8081 札幌市北区百合が原4丁目7-1

百合が原公園 庭のガイド



花の湿原 霧 多 布

長岡 滋 雄 (霧多布湿原センター)

みなさん初めまして、私は霧多布湿原センターの長岡です。さて「初めまして」と挨拶させていただきましたが、実はわたし北海道野鳥愛護会の会員だったことがあるのです。

今から20年ほど前、当時小学生だった私は岩見沢に住んでおり、家族で探鳥会に参加していました。野幌原始林で見たクマゲラ、鶴川でウシに追いかけられながら見たアオアシシギ、冬の小樽港で見たカモメ類など深く印象に残っています。

そんな子供時代をすごし(「三つ子の魂……」か「門前の小僧……」か解りませんが)憧れだったビジターセンターに勤めることができました。

○浜中町の霧多布湿原センター

釧路管内浜中町は、霧多布湿原のある町として知られています。お隣は厚岸町と根室市に挟まれていて、釧路湿原や春国岱、野付半島などからも1時間の位置にあるため、バーダーのメッカになっています。

私の勤める霧多布湿原センターは、町営のビジターセンターとして平成5年に建てられ、周辺の自然情報のほか観光情報や滞在メニューのご案内を行っています。また民間団体の「霧多布湿原センター友の会」には、専門のスタッフを置いて、エコツアーを実施しています。



霧多布湿原センター

○花の湿原と草原の鳥

タンチョウのヒナが孵るころ(6月中旬ごろ)、湿原一面にワタスゲの白い綿毛がゆれます。それから約2週間

湿原の主演達が、次々と変わっていきます。ワタスゲヒオウギアヤメエゾカンゾウノハナショウブという具合です。

そんな花畑の中をノビタキやオオジシギ、ベニマシコ、シマアオジといった鳥たちが、子育てのために飛び回っています。シマアオジは一時期にくらべずっと減ってしまっただと地元のバーダーは嘆息しますが、それでも2~3つがいはテリトリーを確認できます。

また湿原の鳥で忘れてはいけないのが、タンチョウです。霧多布湿原全体で毎年6~7つがいのタンチョウが子育てをしています。湿原の面積の割に少ない数だとも思いますが、霧多布湿原の中心部分はミズゴケなどが発達した成熟した湿原ですので、ヒナに与えるようなエサの採れる環境がないのかもしれませんが。湿原センターの2階や琵琶瀬展望台などからも、ヒナを連れた親子の様子を見ることができます。

○海鳥のコロニー

浜中町を代表する風景としてもう一つ奇岩と岬があげられます。霧多布岬や乙女の横顔のような涙岬、くじら浜といった地名もあります。

またそれらの岩や断崖は海鳥のコロニーとなっています。中でもアゼチの岬は、エトピリカのコロニーがある小島という名前の島を望むことができます。

エトピリカは現在、国内では根室市と浜中町の2カ所しかコロニーがないとされています。そんなわけで「浜中町の鳥」となっています。

毎年1~2つがいが繁殖するほか、その他に5羽前後が確認されています。5月から9月の霧のない日を選んで岬の先端から海上を探すと、誘致のために浮かせたデコイの横あたりに浮かんでいることがあります。30倍程度のスコープがないと確認するのは難しいと思います。

霧多布はその名の通り霧が濃く特に7月8月は一週間のうち4、5日は霧が発生します。もしもエトピリカをという方は5~6月がお

薦めです。

エトピリカ以外でもオオセグロカモメ、ウミウなどがコロニーをつくり、海ガモ類やウミスズメ類などおいて、一

日いても飽きない場所です。数年前までは夜、岬に行くとコシジロウミツバメが「おっぺけぺ〜」と鳴きながら飛んでいたそうですが、近年はあまり聞こえなくなったということでした。

また道東の海岸でのもう一つの目玉は、アザラシです。岬の下の岩礁にあがっている様子を見ることができます。波の弱い時などがお薦めです。

○森林の鳥

湿原を抜けると道東の酪農地帯が広がっています。そしてその間には幅3キロメートルの森が釧路から根室まで伸びています。この森は世界でも珍しい「防霧保安林」なのです。海で発生した霧が牧草地に向かっていかないように森林が残されています。

この森ではクマガラやエゾライチョウが一年中見られます。初夏はコマドリやミソサザイ、センダイムシクイ、エゾセンニユウなど鳥のコーラスが、冬にはハギマシコやアトリなどシベリアからの鳥たちが訪れます。

また奥ではシマフクロウが繁殖する場所もあるという話です。残念なことに浜中町では見たことがないのですが、根室に近い森の中で声を聞いたことがあります。

林道を道産馬に乗ってホーストレッキングができるのですが、高台から湿原を見渡したり野鳥と出会えたり最高です。

○霧多布湿原センター

私の勤める霧多布湿原センターは、この湿原と森のちょうど境目のあたりに立っています。3キロメートル先の海まで見通せる丘の上ですから、渡りの時期には上空をカモメが通過していきます。

センターの2階は展望ホールになっていて、スコープでタンチョウの姿を捕らえることができる他、オオジシギのディスプレイフライトや、小鳥の群などが見られます。すぐ横にクマガラの採餌木があるので、センターにいながらバードウォッチングができます。



霧多布湿原

ここではコーヒーやケーキを頼めるのでゆったり過ごすことができますし、お弁当を持ち込んでもかまいません。天気悪いときは、多くのバーダーが避難してきます。



湿原のタンチョウ

その他シアタールームでは、オリジナルスライドストーリーを上映しています。四季の花の映像などが用意されています。図書ホールには、写真集などを揃えています。これらの本は、展望ホールでご覧になってもかまいません。また地元の主婦の方が手作りの品を置いている、ミュージアムショップ(売店)などもあります。

なんといてもお薦めは「インフォメーションカウンター」。自然情報から穴場スポットまでなんでもご相談に応じます。実は私はこのインフォメーションの担当なのです。入り口すぐのカウンター内にいつでもおりますので、気軽に声をおかけください。

もしも霧多布に来られるのでしたら、まず私から情報収集をされることをお薦めします。

その他、霧多布の自然をご案内する有料のネイチャーガイドなども行っています。町中全部が博物館、美術館のようになると、お客さん(観光客の方)も喜ぶし、住んでいる私たちも誇りがもてます。そういう町作りの運動「エコミュージアム」を浜中町は目指しています。

湿原や森は豊かな海を育てます。浜中のコンブは生産高で日本一。ホッキ貝もアサリもカキもここで採れるものはとても美味しいのです。

森に守られた酪農地帯でとれる牛乳は、やはり日本一の乳質。あのハーゲンダッツのアイスクリームの原料乳は、ここで作られています。

自然と産業が持ちつ持たれつの関係だということが一番知っているのは、ここに住んでいる人たちではないかと思えます。通り過ぎるだけでなく、ぜひ町の人と話をしてみてもらえればいいなあと思えます。

〒088-1360 北海道厚岸郡浜中町四番沢103-19
http://www.marimo.or.jp/Kiritappu_Shitsugen/index.html

北海道における繁殖期のハシボソガラスの分布

藤 巻 裕 蔵

野鳥だより123号のハシボソガラスに引き続き、今回はハシボソガラスの分布について紹介する。ハシボソガラスもハシブトガラスもよく見られる鳥であるが、必ずしも「どこにでもいる鳥」ではない。それでこの2種の分布を比べてみると、ややちがうところもある。前回と同じように、具体的な観察記録に基づいて、分布、環境ごとと標高ごとの生息状況について述べてみたい。使用したデータは主に自分で調査した観察記録で、データの無い部分については、これまでに発表された論文や調査報告書、日本野鳥の会の各支部の支部報の記録（1970年代以降）からの記録を利用した。

今回はハシボソガラスについての紹介であるが、ハシブトガラスと比べながら話を進めるので、「野鳥だより」123号の図と表も同時に見ていただきたい。

分 布

図1は、約10km四方の区画を単位とした繁殖期のハシボソガラスの分布である。観察記録の少ない北海道北部、渡島半島、オホーツク海側では空白の区画が多いが、前回の

ハシブトガラスの分布図と比べると、ほとんど同じに見える。しかし、山間部、とくに標高の高い日高山脈山頂部、大雪山系、阿寒山地で観察されなかった区画が見られ、観察された区画の数はハシボソガラスの方で少ない。反対に、平野部では観察された区画の数は、ハシボソガラスの方で多かった。このことは、次の生息環境で数量的に示すことにする。

表1. ハシボソガラスの生息環境別・標高別の出現率

生息環境	調査 路数	標 高 (m)						計
		101~ ~100	201~ 200	301~ 300	401~ 400	501~ 500	601~ 600	
ハイマツ林	10	—	—	—	—	—	—	0
常緑針葉樹林	10	—	0	0	0	0	—	0
針広混交林	91	20	18	0	20	13	0	10
落葉広葉樹林	74	8	25	29	0	0	0	15
カラマツ人工林	17	50	0	0	33	0	—	12
農耕地・林	110	77	48	50	57	75	—	65
農耕地	131	84	70	76	83	—	100	79
住宅地	14	80	0	100	—	0	100	71



図1. 北海道における繁殖期のハシボソガラスの分布

一つの区画は、約10km四方で、1/25000地形図に相当する。

●=生息が確認された、○=調査したが、観察されなかった。·=未調査の区画。

生息環境

調査したのは457か所である。それらの生息環境を、ハイマツ林、常緑針葉樹林（人工林も含む）、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林（観察路沿いの環境の20%以上が林地の場合）、農耕地、住宅地の8つに区分し、環境・標高別に出現率を表1に示した。

ハシボソガラスは、ハイマツ林と常緑針葉樹林では見られず、その他のタイプの森林でも出現率は11~15%と低かった。この点、ハシブトガラスは森林での出現率は40~90%とハシボソガラスより高かった。それに対して、農耕地・林と農耕地でのハシボソガラスの出現率は65~79%で、ハシブトガラスの43~45%より高かった。このように、ハシブトガラスが森林性なのに対し、ハシボソガラスは農耕地のように開けた環境に多く、この2種の生息環境の違いがはっきりと見られる。ただ、住宅地では2種の出現率はあまり変わらず、同じように住宅地を採餌場に行っている様子が見える。

2種の生息環境の違いがみられたので、環境を森林とそれ以外の環境（農耕地・林、農耕地、住宅地）とに分けて、標高別の出現率を見てみる。ハシボソガラスの出現率は、森林では標高101~200mで23%であるが、501m以上では0%に近くなる。それ以外の環境では全体に森林より高く

なり、大体60~80%の範囲であるが、601m以上では0%となる。分布のところで述べたように、山地、とくに標高の高い所であり見られなくなる状況が、これらの数値でも裏付けられる。これに対し、ハシブトガラスの方は、全体に高い標高でもよく見られる点が変わっている。ちなみに、2種が観察された最高標高は、ハシボソガラスで850mであったのに対し、ハシブトガラスでは1800mであった。

まとめ

ハシボソガラスは農耕地のように開けた環境に生息し、森林では非常に少ない。また、垂直分布ではおもに標高700m以下に生息する。これに対し、ハシブトガラスは森林に生息するほか、農耕地にも生息するが、ハシボソガラスに比べると農耕地では少ない。垂直分布では低地から高い標高まで広い範囲に生息している。ただし、住宅地ではどちらの種も同じように生息している。このように、住宅地を除くと、両種の主要な生息環境は異なっており、垂直分布にも違いが見られる。

〒080-8555 帯広市稲田町西2-11

帯広畜産大学野生動物管理学研究室

マナヅル 観察記録

佐藤 幸典

3月18日は千歳の遠藤氏と約束し、鶴川へ行く事になっていた。先週は苦小牧の佐藤氏達と、マガンの中にあるハクガンを撮影。私の写真の出来がまだまだ不満足で、鶴川行きを決めていた。

行く前にEメールを開けてみてびっくり。鶴川の小山内さんからマナヅルが17日から田浦に来ている！と。

ビッグニュースである。遠藤氏とハクガンどころではなく、マナヅル捜して、あちこちマガンやハクチョウのいる所を車で流す。

入鹿別川を苦小牧方面から渡ると、すぐの畑の中にオオハクチョウと一緒にいた。「きれいだ。」「優雅だ。」が第一印象である。

いつの間にか数本撮ってしまっていた。そろそろハクガンを撮りに行こう、とそこを離れる。

小山内さんに電話。ハクガンは？と聞くとすぐ案内するからとすぐ来てくれて現地に到着。何とさっき撮影していた所から1キロメートル位しか離れていない。嘩然と言う所だ。帰ってからマナヅル情報をメールで鳥仲間連絡。

3月25日長都沼にガン・カモを見に行く。マガンが鍵に

なり竿になり、あちこちに採餌に飛んで行く。沼にはヒシクイがたくさんいる。カモはオナガガモしかいないのではと思う程である。それでも何とトモエガモが4羽確認出来た。

帰ろうかと思っている所に、甥の北山が板田氏の車に同乗して、鶴川にはもうマナヅルはいなかったと話す。そこに千歳の遠藤氏が、マナヅルいるからと教えてくれた。早速すぐ移動。マナヅルは畑で採餌していた。一度飛んだが数回転回してまた同じ所に降り立つ。そのうちもう一度泉郷方面に飛び立ち今度は戻って来る様子はなし。私はまたマナヅル情報をメール発信。

3月27日出勤途中、千歳川の長都大橋たもとの畑で採餌しているマナヅルを偶然発見。帰宅途中、遠藤氏にその話をすると、遠藤氏も仕事で江別に行く途中見たと言っていた。その後私は見ていないが、遠藤氏のホームページによると29日まで確認しているようだ。

長都大橋たもとの行政区は、千歳市。25日長都沼で採餌していた所も千歳市だった。2万5千分の1の地図には長都沼の西（長沼）と、東（千歳）に斜めに境界線が走っていた。



長 都 沼

3月31日マナヅルを見たくて長都沼に行く。井川浩氏、井川マリジョさんに会って話をしていると、何と2月24日浜厚真でマナヅルを発見した人だった。その後、3月10日田浦へ移動。3月24日はダイサギと一緒にいたとの情報ももらった。また、後で聞いたことだが、井川さんたちは4月1日に南幌町で約200羽の白鳥とマナヅル1羽が田んぼにいるのを再び観察したとのことである。

そんな折、当会幹事の樋口氏からこの原稿を依頼された。過去の記録を詳細に書いてくれて、その中で一番驚いたのは、1985年に長沼町舞鶴での営巣だった。6月28日に1羽が死亡して繁殖は成功しなかったようだ。

ここにその資料をそっくり掲載して、皆様に広く知っていただくと思う。

1871年

千歳（日本鳥学会、日本鳥類目録第5版、1974年）

1978年10月29日

女満別町（大西重利、野鳥だより第38号、1979年）

1979年12月24日

阿寒町阿寒23線（北海道新聞1979年12月25日）

1980年12月11日

阿寒町阿寒23線（北海道新聞1980年12月12日）

1980年3月27日 浜中町丸山散布

1981年2月13日 阿寒町阿寒23線

1983年4月1～15日

大成町（小山政弘、「野鳥だより」第61号、1985年）

1984年4月 余市町（北海道新聞1984年5月1日）

1984年5月12日 浦幌町平和

1984年5月27日、6月12日 豊頃町育素田

1985年4月1日

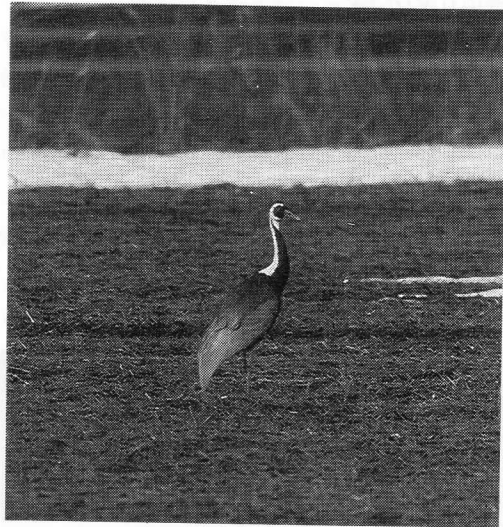
豊頃町育素田（北海道新聞1985年6月6日）

1985年

長沼町舞鶴（正富宏之、「日本鳥学会誌」第47巻、1999年）

1985年5月 札幌市白石区（朝日新聞1985年5月8日）

1992年4月5日 遠別町（北海道新聞1992年5月18日）



マナヅル 撮影 筆者

〒068-0834 岩見沢市駒園7丁目44-37

[編集部（樋口）注]

過去の記録については主に以下の資料を参考にしました。

藤巻裕蔵、2000年、「北海道鳥類目録」改訂2版

日本野鳥の会十勝支部・釧路支部、1987年、「十勝と釧路の野鳥」1987年「十勝・釧路地方鳥類目録」

また、藤巻裕蔵教授（帯広畜産大学）からは記録の詳細などについて教えていただきました。

十 勝 地 方 で の 鳥 見

高 橋 良 直

平成10年4月から昨年3月までの2年間、転勤のため帯広市に住み、その間十勝管内の全域で鳥見を楽しみました。個人的な鳥見の体験をレポートさせていただきます。

十勝方面には特に名の知れた探鳥地はありませんが、豊かで多様な自然が比較的残されていて、鳥の生息密度も高く、いわば至る所が鳥見のフィールドなので、探鳥地とし

て特定のポイントを絞ることが難しいように思います。

札幌周辺と比較した場合、野鳥の分布にさほど大きな違いはないのですが、生息数にはかなりの差があるように感じます。身近な例でいうと、ヤマガラ、コゲラなどは十勝では生息数が少ないようで、市街地で見かけることはまれでした。反対にコアカゲラは札幌周辺での観察例は少

ないかと思いますが、帯広市内の公園、神社などでしばしば出会いました。また、オオジシギは札幌周辺ではなかなか見られなくなっているようですが、十勝では4月から6月頃にかけてほぼ全域で見られ、帯広市内でも住宅地に接した草原で、普通に見ることができます。このほかアオジ、ノビタキ、ベニマシコ、オオジュリンといった草原性の夏鳥は、十勝管内のほうが、圧倒的に飛来数が多いように思いますし、冬季を除いてタンチョウも普通に見られます。

次に、この2年間の鳥見で特に印象深かったものを紹介します。

1 帯広川の水鳥

帯広市内を流れる帯広川が札内川に合流するあたりでは、毎年オオハクチョウが200羽ほど越冬しますが、秋から翌春にかけて、カモ類などの水鳥が多数見られます。

ここでは20種を超える水鳥を見ましたが、これほど多種類の水鳥を間近に見られるところは、道内でも少ないのではないかと思います。カイツブリやミコアイサがそれぞれ数羽越冬したり、オカヨシガモ、アメリカヒドリ、シマアジ、オオバンなどがしばらく滞在したりしていました。



秋の帯広川 撮影 筆者

珍しいところでは、アカエリヒレアシシギやトモエガモが迷い込んだのを見たこともあります。

2 帯広郊外でのオオタカの営巣

帯広郊外の森で営巣中のオオタカを発見し、約40日間の抱卵後、誕生した2羽のヒナが成長する様子を観察するという得難い体験をしました。産卵の直前、親鳥は鋭い視線で周囲を警戒しながら数日間巣の上でただじっとしていましたが、その様子に荘厳さと、気品の高さのようなものを感じました。

3 十勝川河口付近で見たシギ・チドリ

あまり知られていませんが、かなりの種類のシギ・チド

リ類が十勝川河口の周辺に立ち寄ります。数はさほど多くありませんが、例年20種ほどは観察されているようです。22羽のムナグロが横一列に並んで、きれいな夏羽を見せてくれたことや、干潟でキョウジョシギの採餌の様子を間近に観察できたことが、特に印象に残っています。また、このあたりの沼では、夏にアカエリカイツブリ、ダイサギ、タイナ、バンなども見ており、少数ながら繁殖しているものと思われます。

4 渡り途中のヒシクイ

春と秋それぞれ一月あまりヒシクイ(亜種オオヒシクイ)が、浦幌町など十勝地方の東部に滞在します。多いときは4、5千羽になることもあり、日本に飛来するオオヒシクイの大半が、ここを中継地としているものと考えられます。マガンも相当の数が、このあたりを中継地にしています。

5 高山地帯での鳥見

日高山脈や東大雪方面で、鳥見を兼ねた山登りを何度かしました。高山にはまた異なった鳥の分布が見られます。何度か見かけた鳥を見た場所の標高の高い順に列挙しますと、カヤクグリ、ノゴマ、ルリビタキ、ホシガラス、エゾライチョウ、ビンズイ、コマドリ、クロジ、マミジロのようになります。カラ類やアオジなども、かなり標高の高いところで見かけました。日高山脈伏美岳と東大雪ウベベサンケ山の山頂(ともに標高1,800m前後)でさえずっていたノゴマが、特に印象に残っています。

このほかには、オオワシ、オジロワシをはじめ、主として十勝東部の沿岸部で見られるミサゴ、クマタカ、ハイイロチュウビ、ハヤブサ、コミミズクなどの猛禽類、帯広郊外の森で出会ったフクロウやトラツグミ、池田町の十勝川河川敷で見たシマアオジなどが、記憶に残っています。管外になりますが、浜中町霧多布に通うこと3度目にして、ようやくエトピリカを目にすることができたことや、根室市春国岱で見たミヤコドリなどいい思い出です。

十勝管内では浦幌町の「浦幌野鳥倶楽部」が活発な探鳥活動が続けており、会員に加えてもらって、毎月の探鳥会に参加させていただいていました。浦幌町は奥深い山から草原、大小の河川と湖沼、海岸などの多様な自然に恵まれ、5月には町内で1日に80種以上の鳥が見られるようなところなので、機会があったらぜひ一度立ち寄られることをおすすめします。

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6丁目8-1

探鳥の思い出

大村正道

鳴合せの真似事をと、テープを持出した。バーダーを自認はしても、気候な出会いの実現には、待ってくれてる相手あってのこと。“沢沿いの決まった木の、決まった梢にしかとまらない。”^①とされているオオルリが、わがお気に入りポイントに訪れる。光沢のあるルリ色に、黒いムネ、白いハラのダンディな姿と美声を、期待してテープを廻した。間もおかず芽吹き梢に気配があつて、わが相棒があらわれた。音量一ぱいの高声に日頃のゆったりさを少し失くして、神経質に枝移りをするが、テープを中断すると、すぐ競うようにさえずり始める。枝移りもごく周辺に限られて、ポイントを離脱して飛去ることはない。“口笛でオオルリを鳥寄せするときは、向こうの声より少し弱めに吹く。強く吹くと、こちらが進むだけ向こうが逃げる。”^②から、テープの主は彼と調和しているのだろうと勝手に決めつけて、出会いを楽しむ。と、突然頭上をよぎる羽音に一瞬虚をつかれて、あわてて低空攻撃してくる小鳥を確かめると、なんとキビタキ。テープはオオルリに続いてキビタキが録音されていて、その声で攻撃をかけてきたものらしい。“近づくには後ろからではなく、前からがよい。”^③と述べられているのは、この気の強さをいうのだろうか。はるか昔、卵を狙って木登りをしたワンパク坊主が、気付いた親ガラスに後頭部を執ように反復攻撃されて、ついに泣きだした故郷の思い出がよみがえり、種それぞれの性格を楽しんだ。

探鳥会で「あれは何だ！あの緑の大きな鳥」。スットン狂なわが叫びに、「あーあれ、ヤマゲラ。キツツキの仲間です」。笑みを含んだリーダーの説明に、「そんな！キツツキは黒いだろうに！」。初めての参加で声を失ったのが、探鳥の始まり。ならばと、双眼鏡をのぞき続けるうちに、クマガラの食事、エゾライチョウの擬傷行動、チゴハヤブサの居眠りなどにもお目にかかれて、犬も歩けば式に、スズメとカラスだけの世界が、少しずつ広がって探鳥日誌も増える。「ウズラはアジャパーと鳴くんです」。説明も年令がわかるというものだが、実感そのものだ「ホラ潜水艦、ハシビロ……」。

福移、植苗、千歳川と参加を重ねるごとに、口元をホロボロさせながら、その一時一時を楽しむ。そんな日々の積重ねが、やがて思いもかけぬ彩りを人生に恵まれることになった。

機会を得て、スイス旅行に参加した。セガンティニ美術館近くの民家の庭で、餌を拾う2羽のクロウタドリとともに嘴に羽虫をたっぷり含んだ小鳥を、枝に発見した。利尻

の報告^④を羨ましく記憶していたそのズアオアトリにお目にかかれたと気がついて、一瞬離島のそよぎがよぎった。ウエンパー^⑤に想いを寄せてのヴァレイアルプスのハイキング、永年念願の山道を、一步一步踏みしめて味合っていた。と、山の清気を切り裂くように、突然として響きわたる聞き覚えの「ヒンカラカラ……」に釘付けられて立ち止まる。なんと、目の前の枝で天を仰いで懸命に囀る鮮紅色のヨーロッパコマドリ。われらがコマドリとは、下ムネに多少の違いはあるが、囀りは全く同じ。マッターホルンを背景に響きわたる見事な声音に、ただ我を忘れて立ちつくした。アルプスの山容と野鳥の囀り。私の心に深く深く刻みこまれた彩りは、今も鮮やかである。

見馴れたつもりのヤブサメだが、“雪が融けササが立ち始める時期には高い小枝で囀る”^⑥という。その囀りに触れたいと思いつつ、体調調整せず、今年もまた時期を失しそうである。

フキノトウが萌え出で、ヒバリの高鳴きも賑やかになって、いよいよシーズン入りとなった。なんとか探鳥日誌のページを、増やしたいと思う日々である。

(資料)

- ① 犬飼 哲夫「北の新博物記」
- ② 川村多実二「鳥の歌の科学」
- ③ 中村 登流「森と鳥と」
- ④ 小杉 和樹「野鳥だより」No.81(平成2年)
- ⑤ ウエンパー「アルプス登攀記」
- ⑥ 川路 則友「野鳥だより」No.104(平成8年)

〒004-0071 札幌市厚別区厚別北1条4丁目11-306



フキノトウ 筆者 画

平成13年度 総 会 報 告

日 時：平成13年 4月14日(土) 午後 2時～ 4時
 場 所：札幌市民会館 第2会議室
 谷口一芳会長の挨拶のあと、議長に小堀煌治氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成12年度事業報告

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
 開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
 開催期間：平成12年 5月 9日(火)～ 5月28日(日)
 出 展：12名、22点
- (2) 「野鳥だより」の発送(120号～123号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
 講 師 綿貫 豊氏「北海道に生活する海鳥たち」
 平成13年 1月13日(土)、札幌女性センター
 参 加 者：57名
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成 70部
- (5) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)
- (6) 傷害保険の更新

- (7) 30周年記念誌作成作業(7名の編集委員による作業)

[広 報]

「野鳥だより」120号～123号の発行
 121号から、従来のB5版からA4版にし、文字サイズも大きくした。

[探 鳥]

探鳥会 21回。参加者累計 714名。(1回平均 34名)
 「野幌森林公園を歩きましょう」開催 6回。
 参加者累計 110名。(1回平均 18名)

[会 計]

- (1) 平成12年度決算報告
- (2) 平成12年度会計監査報告。大野信明監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成13年度事業計画

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
 開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
 開催期間：平成13年 5月 8日(火)～ 5月28日(月)
- (2) 「野鳥だより」の発送(124号～127号)

平成12年度 決 算 書

(収入の部)

項 目	予算額(A)	決算額(B)	増 減 (B-A)	摘 要
繰越金	438,118	438,118	0	
個人会費	680,000	622,000	△ 58,000	2,000×延べ311名 (前納を含む)
家族会費	120,000	150,000	30,000	3,000×延べ50家族 (前納を含む)
団体会費	10,000	10,000	0	5,000×2団体
寄付金	0	103,667	103,667	野口夫人からの寄付金ほか
参加費	25,000	28,500	3,500	新年講演会
売上金	190,000	191,200	1,200	野鳥だより、 カレンダーほか
雑収入	882	9,332	8,450	一泊探鳥会剰余金、 預金利子
合 計	1,464,000	1,552,817	88,817	

(支出の部)

項 目	予算額(A)	決算額(B)	増 減 (B-A)	摘 要
印刷費	570,000	581,250	11,250	野鳥だより 4回発行
通信費	200,000	184,160	△ 15,840	野鳥だより発送費 ほか
会議費	35,000	32,400	△ 2,600	幹事会会議室使用料
消耗品費	50,000	12,489	△ 37,511	封筒ほか
交通費	20,000	13,000	△ 7,000	野鳥だより発送事務 の幹事交通費
報償費	95,000	92,000	△ 3,000	事務所・講師謝礼 ほか
雑 費	70,000	48,070	△ 21,930	傷害保険料、 写真展ほか
予備費	424,000	0	△ 424,000	
特別会計へ繰入	0	100,000	100,000	30周年記念誌作成特別会計へ繰入
次年度へ繰越	0	489,448	489,448	
合 計	1,464,000	1,552,817	88,817	

30周年記念事業特別会計

平成12年度 決 算

(収入の部)

項 目	決 算 額	摘 要
繰越金	400,000	
一般会計から繰入	100,000	野口夫人からの寄付金相当額
補助金	280,000	前田一歩園からの補助金前受分
合 計	780,000	

(支出の部)

項 目	金 額	摘 要
消耗品費	9,200	コピー代
次年度へ繰越	770,800	
合 計	780,000	

- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
(平成14年1月中)
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成 70部
- (5) 定例幹事会の開催(原則として毎月第1水曜日)
- (6) 傷害保険の更新
- (7) 30周年記念誌の作成・発行
- (8) 会員名簿の作成

[広報]

- (1) 「野鳥だより」124号~127号の発行
- (2) 野鳥愛護会ホームページ作成の検討と準備

[探鳥]

- (1) 探鳥会 21回(旭岳温泉周辺1泊探鳥会を含む)
- (2) 「野幌森林公園を歩きましょう」 5回

[会計]

- (1) 平成13年度予算(案)

※会員数

項目	11. 4. 1	12. 4. 1	13. 4. 1
個人会員数	330名	325名	324名
家族会員数	33家族	31家族	42家族
団体会員数	2団体	2団体	2団体

[役員人事]

永島良郎氏、山田良造氏(ともに探鳥幹事)が退任し、村田静穂氏(札幌市)が探鳥幹事に、高橋良直氏(札幌市)が広報幹事に新たに加わった。

[平成13年度役員]

会長 谷口 一芳
 副会長 小堀 煌治、戸津 高保
 監事 大野 信明、村野 紀雄
 会計幹事 浦澤鉄太郎、清水 朋子
 代表幹事 白澤 昌彦
 幹事

(総務)◎中正 憲佑、井上 公雄兼、大町 欽子
 岡田 幹夫、浦澤鉄太郎兼、栗林 宏三
 佐藤ひろみ兼、三船 幸子、渡辺紀久雄

(探鳥)◎井上 公雄、梅木 賢俊、梶浦 孝純
 栗林 宏三兼、後藤 義民、佐藤 幸典
 竹内 強、戸津 高保兼、富川 徹
 富田 寿一、浪田 良三、野坂 英三
 長谷川富昭、早坂 泰夫、村田 静穂
 渡辺 俊夫

(広報)◎樋口 孝城、佐藤ひろみ、白澤 昌彦兼
 芹澤 裕二、高橋 良直、竹内 強兼、
 武沢 和義、道場 優、道川富美子
 山下 茂 (◎印各担当の代表者)

平成13年度 予 算 書

(収入の部)

項目	本年度 予算額	前年度 予算額	前年度 増減	摘 要
繰越金	489,448	438,118	51,330	
個人会費	640,000	680,000	△ 40,000	2,000×320名
家族会員	126,000	120,000	6,000	3,000×42家族
団体会費	10,000	10,000	0	5,000×2団体
参加費	28,000	25,000	3,000	新年講演会
売上金	190,000	190,000	0	野鳥だより、 カレンダーほか
雑収入	552	882	△ 330	預金利子ほか
合計	1,484,000	1,464,000	20,000	

(支出の部)

項目	本年度 予算額	前年度 予算額	前年度 増減	摘 要
印刷費	600,000	570,000	30,000	野鳥だより4回発行
通信費	200,000	200,000	0	野鳥だより発送費 ほか
会議費	33,000	35,000	△ 2,000	幹事会会議室使用料
消耗品費	50,000	50,000	0	封筒ほか
交通費	15,000	20,000	△ 5,000	野鳥だより発送事務 の幹事交通費
報償費	92,000	95,000	△ 3,000	事務所・ 講師謝礼ほか
雑費	70,000	70,000	0	傷害保険料、写真展 ほか
特別会計へ 繰入	200,000	0	200,000	30周年記念誌作成特 別会計への繰入
予備費	224,000	424,000	△ 200,000	会員名簿作成費
合計	1,484,000	1,464,000	20,000	

30周年記念事業特別会計

平成13年度 予 算

(収入の部)

項目	決算額	摘 要
繰越金	770,800	
一般会計から繰入	200,000	
補助金	120,000	前田一歩園からの補助金残金
合計	1,090,800	

(支出の部)

項目	金額	摘 要
記念事業費	1,090,800	記念誌印刷費、通信費ほか
合計	1,090,800	

与那国島探鳥旅行にて

片山 實・慶子

3月中旬、与那国島に出かけた。狙いの鳥に会えず、やや気落ちしていたところ、16日の八重山毎日新聞に「日本初、珍鳥バンケンが飛来」の見出しで、写真入りの記事が目に入った。発見したのは、石垣島出身の本若博次氏である。

同氏にはガイドをお願いしていたところから、再三発見場所、周辺部を案内していただいたが、出会えず、翌17日これが最後と探していると、ヤブの中にちらちら動く鳥がいる。本若氏が「バンケンだ」と声を発する。車の窓をあげ目をこらしていると姿を現し、木の枝に止まった。距離は凡そ20m、双眼鏡で見ると、頭、胸、腹それに長い尾が黒く、肩羽から腰が濃い褐色。慌ててカメラのシャッターを切る。間もなくヤブの中に姿を消したが、この間5～6分。

定番のオオチドリ等には会えなかったものの、予期しない珍鳥に出会え、幸せ気分で帰途についたことは言うまでもない。

〒007-0870 札幌市東区伏古10条2丁目15-10

【編集部注】

バンケン *Centropus bengalensis* はカッコウ科バンケン属の鳥で、フィリピンや台湾などに生息しています。与

那国島での記録が、学術誌などに発表されると、日本鳥類目録に加えられる可能性があります。まだ正式な段階ではありませんが、片山さんご夫妻の探鳥旅行の貴重な思い出として、文章と写真を寄せていただきました。



バンケン

2001. 3. 17 与那国島 撮影 筆者



宮島 沼

2000. 10. 8

(2000年未掲載分)

【記録された鳥】カイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、チュウビ、ハイタカ、オオタカ、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カワアイサ、ツルシギ、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ツグミ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、ムクドリ

以上 35種

【参加者】高橋良直、山口和夫、片山 實・慶子、関口健一、鈴木繁雄・英子、成澤里美、吉田 功・美子、中正憲信・弘子、山本昌子、三船喜克・幸子、今泉秀吉、佐藤幸典、清水朋子、渋谷信六、岩崎孝博、佐藤ひろみ、小関敏文・諒人、後藤義民、栗林宏三、遠藤美浩、金澤治江、戸

津高保、品川睦生、稲垣敦之、井上公雄 以上 31名

【担当幹事】佐藤ひろみ、栗林宏三

円山公園付近の環境変化について感じること

--- 例会報告に代えて ---

2001. 3. 4 武沢 和義

例会の始まる少し前から降りだした小雨が、徐々に強くなっていくという天候のもとでの探鳥会となった。歩けない程には強い雨ではなかったが、すぐに双眼鏡や眼鏡に雨滴が付いて落ち着いて観察出来ない。一見して種類の判るもの以外は、かろうじて種の同定ができただけという感じであった。ということで、例会報告的なものは最後のリスト(13種)を見ていただければ充分と思うので、今回は少しばかり別の観点からの報告を述べたい。

ここ数年の円山例会の始まりのミーティングでは、今年は鳥の数が少ないですねと、毎回ほとんど同じことを言っている。円山公園で観察される鳥の個体数が年毎に減ってきている。野鳥の減少は日本全体で進行している問題であり、ここでその原因を述べることは難しすぎて出来そうに

ないが、円山公園では周辺の環境変化との因果関係が多少はっきりしていると思う。

昨年、公園管理事務所の裏に、公園に接して15階建て(45m)のマンションを建てる計画が持ち上がった。その前に公園の宮の森側でマンション建設の動きが具体的に進められていた。いずれの場合も、自然環境との調和が取れないということで反対運動があった。ここではその是非については述べないが、この一件を通して円山公園周辺にどんな環境変化が起きていたのか、私にも見えてきたと思っている。

マンション自身は10階建てに設計変更になって認可されたが、高層マンションが建つことには変わりはない。さて、その場所であるが、公園と住宅地域との境界になっており、サワラの木がびっしりと植わっていて、その内側は管理事務所のゆったりとした自然庭園といった風情があった。以前ここにバードテーブルがあり、木々の枝の間をカラ類などがしきりに飛び交っていて、例会の時には、これから探鳥会が始まるという雰囲気醸し出していた。バードテーブルがなくなってからも、マヒワやハギマシコがよく観察される場所であった。しかし、今やそのサワラの木は、頭が切り落とされ、枝がすっかり払われている。今年の例会の時も、すき間だらけの木の間から、建設用のクレーンの姿がまともに見えていた。

大倉山シャンツェから見下ろすと、円山は周りを住宅に取り囲まれた孤立緑地に見える。しかし今の段階では、円山公園と北海道神宮を含む円山を囲んでいるのは、いわゆる低層住宅である。これは従来、公園隣接地が第一種低層住居専用地域となっていたからである。ところが、1996年に用途地域の変更がなされ、環状通と公園の間(円山公園の東側に沿う地域)が第一種中高層住居専用地域となった。マンション騒動の一番本質的な問題はここにある。もし管理事務所裏のマンション建設がはしりとなって、公園沿いの高層マンションが立ち並ぶと、これらがサワラの木に変わって円山公園の外壁になってしまう。そして今でもつながりの希薄な植物園や北大などに点在する緑地と完全に遮断され、公園は今以上に孤立緑地となるだろう(本当は市街地に点在する緑地が、背景に自然林を持つ円山公園から切り離されると言ったほうがよいかもしれない)。その結果、円山公園・北海道神宮の野鳥分布はどのように変化するのだろうか? 今後、この変化をしっかりと見届けて行きたいと思う。今年は21世紀の始まりの年であるので、どのくらいの年月で、どのように変化したかということを経験していきやすいかと思う。振り返ってみると、鳥の数が減り始めたのは、地下鉄円山公園駅周辺にマンションが増え始めたころからと思われる。最近の円山公園周辺地域では毎年数棟ずつ増えている。

そのかなり以前にも、円山山麓・公園・神宮の自然の生態系に大きな変化が起きている。1977年に環状通が建設され、その後に円山墓地が大々的に整備された。それから時

期的な前後関係がはっきりしないのだが、北海道神宮内の参拝道路も整備された。公園から開拓神社に行く途中の坂道も見違える程きれいになった。これらは見掛けの美観という観点からは、申し分の無いことであったが、それ以降、急激に昆虫が姿を消していったと記憶している。そして観察できる鳥の種類が減っていった。自然の変化は急激には言っても、日常的な時間感覚と較べると緩慢であり、その間に季節変化が入る。そして何時の間にか、今ある自然の姿が当たり前のものと思込んでしまう傾向がある。円山周辺から野鳥の種の数と個体数が減り始めたのは、何も急に始まった事ではなく、かなり以前から着実に進行していた。以前はこうだったと言うと、何か昔を懐かしむという感じがするが、本当はこうあるべきなのだ、積極的な価値基準とすべき部分が沢山ある。どこでその線を引くのか、時々円山公園を歩いて考えてみたいと思う。

〒064-0804 札幌市中央区南4条西26丁目2-17

【記録された鳥】ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、マヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ドバト

以上 13種

【参加者】山口和夫、高橋利道、吉田慶子、今村三枝子、蒲澤鉄太郎、岩崎孝博、加藤花子、山田良造、秋田和子、中正憲信、栗林宏三、武沢和義

以上 12名

【担当幹事】武沢和義、栗林宏三

ウトナイ湖

2001. 3.25 岡山 壮

3月25日朝6時、起きて窓の外をながめると、薄日のさす穏やかな天気、自然観察には良い日よりでした。

ウトナイ湖畔に着くと、早春らしい和らいだ空気と、湖面に反射するやさしい光につつまれ、オオハクチョウをはじめ数種の渡り鳥たちが集まっていました。

私は野鳥に関しては全くの初心者で、愛護会の方から配られた資料は、鳥の名は殆ど知らないものばかりでした。しかし湖畔を移動しながら、会の詳しい方から羽根やくちばしの色の違い、餌などの説明を聞き、双眼鏡で観察して行くうちに、マガン、ヒシクイ等一つ、また一つと確認できるようになり、野鳥の存在が少しずつ自分に近くなって来たような気がしました。

「オオワシが見えますよ」と案内の方が方向を示して教えて下さったので、スコープを覗くと、湖の中程に一際大きく黒く、佇んでいるものがあり、「これがあのオオワシか」と感動をもってしばし見入っていました。大小の群れをなして飛びかう渡り鳥たちを、泰然と見上げている姿には、王者の貫禄が感じられました。オオワシは羽根をひろげると2m以上で、魚、カモなどを餌にすること、この地に滞在するのは一時期だけで、やがて故郷の樺太、大陸方面へ帰って行く等の、説明を戴きました。役員の方が

地図を開いて説明して下さり、私にとってはたいへん勉強になりました。

ネイチャーセンターに着く頃には、オオワシは2羽になって仲よく佇んでいました。

特別天然記念物のタンチョウに出逢う事が出来たらという若干の望みも有りましたが、多くの野生の鳥たちを間近に観察でき、特徴などを学び、楽しく有意義な2時間でありました。

探鳥会から数日後の夕刻、上厚真からウトナイ方向へ向かう数百数千の夥しい渡り鳥(マガンではないか)の群れに遭遇しました。しばらくの間見上げ、おおいなる自然界のいとなみに圧倒される想いで、最後の一群が小さな点になるまで見送りました。

近年、人間の開発の波の押され、かけがえのない自然界の生態系は、大きく崩されて来ました。ウトナイ周辺も例外ではないようですが、年々多くの植物、生物が姿を消しており、これは人間自身にとっても真に悲しい事です。しかしながら、全ての人には自然の営みに対する畏敬の心が本来宿っているはずで、自然を大切にすることを養い、ひとにも伝えてゆきたいと思っております。

はるか北方のふるさとを目指して旅立ってゆく鳥たちの前途を、祈っております。

〒053-0842 苫小牧市有珠の沢町

【記録された鳥】 カイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、コゲラ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、マヒワ、ウソ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 37種

【参加者】 岡山 壮、松原寛直・敏子、蒲澤鉄太郎・則子、山田良造、高橋良直・美奈子、大滝和磨・洋子、戸津高保・以知子、鈴木繁雄・英子、藤原伸彦・和子、板田孝弘、北山政人、品川睦生、木村与吉、吉田慶子、山本恒昭・充子、成澤里美、小堀煌治、田中哲郎、横山加奈子、山口和夫、山田 勇、樋口孝城、大町欽子、道場 優、三船喜克・幸子、富田寿一 以上 35名

【担当幹事】 富田寿一、道場 優

宮島沼探鳥会感想文

2001. 4. 22

札幌市立東苗穂小学校4年 小 関 諒 人

「北海道ウォッチングガイド」を朝に見た。今日は宮島沼だ。8時に家を出た。宮島沼へ行く、と中に雨がふって来た。「ちょっと心配だな。」と思いながら宮島沼へ行った。やっと宮島沼が見えた。沼にはオオハクチョウ、マガン、

オナガガモ、キンクロハジロ。あまり鳥をおどろかさないうようにして少しずつ近づいて行った。でもオナガガモなどが人間におどろかないで近よって来た。「静かに歩く事なかった」。沼の水をさわってみると、けっこうつめたい。なのにカモ、ハクチョウなどが、水の上にかんている。カモたちが、こんなに苦痛だという事を、初めて知った。あとからシジュウカラガン、カリガネ、カワウ、ハシビロガモ、ヒシクイなどの水鳥がたくさんいた。シジュウカラガンは、おくの方において、シジュウカラのように首から頭までが黒く、頬が白い。もう1羽はマガンとの交雑個体だった。去年にも宮島沼で見たやつかもしれない。カリガネは、マガンと少しちがって目の回りが黄色く、くちばしは小さい。カワウは、マガンのむれよりも、おくの方において、2羽で飛んでいった。その時は双眼鏡で見ていたので、たしかに黒い鳥だという事がわかった。ハシビロガモは、雄と雌のつがいで、去年、オジロワシの止まったシラカバの木の下に、2羽で止まっていた。「ジャバッ。」と大きな水の音が聞こえた。マガンではないと思って見たら、ヒシクイだった。ヒシクイは、マガンよりも見たところ、大きかった。

そのあとは、雲行きが悪くなったので、大富会館に避難した。その中には、宮島沼の鳥のしゃしんがあった。あんまり宮島沼まで来る事がないので、見る事のできる物はぜんぶ見てきた。しゃしんを見ていると、愛護会の人たちが急にいなくなった。外に出てみると、もうとり合わせをしていた。おくれてしまったので、他の人に見せてもらう事にした。「今日、見たのは、26種だよ。」と言った。でも、ハシブトガラスがぬけている。急いでその人におしえた。そして、雨もふりだし、探鳥会がおわった。今日は27種の鳥が見られた。

〒007-0805 札幌市東区東苗穂5条3丁目5-20
アルコン53A (103)

【編集部注】 鳥合わせでカワウとされた鳥については、ウミウの可能性もあるため、記録ではウsp. としました。

【記録された鳥】 ウsp. アオサギ、トビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ハクガン、シジュウカラガン、カリガネ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、カモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス

以上 27種

【参加者】 高栗 勇、和久雅男、村田静穂、関口健一、雪田昭治・久子、山下和子、大野信明、今村三枝子、蒲澤鉄太郎・則子、戸津高保・以知子、松原寛直・敏子、後藤義民、板田孝弘、高橋良直、小堀煌治、川端正晴、岸谷美恵子、成澤里美、山口和夫、小関 敏・諒人、山田良造、高橋美奈子、山本昌子、品川睦生、藤原伸彦・和子、今泉秀吉、真壁スズ子、横山加奈子、村上トヨ、竹林正昭、岩崎孝博、佐藤幸典、佐藤ひろみ、田辺 至、井上公雄

以上 41名

【担当幹事】 = 佐藤幸典、佐藤ひろみ

藤の沢

2001. 5. 5 日 枝 幸 子

今年の連休は晴天に恵れる日が続き、5月こどもの日もさわやかな風が吹き、少々雲はありましたが、良いお天気でした。今日の藤の沢の探鳥会はとても楽しみにしてました。以前から小鳥の村に行ってみたくて思っていました。同じ札幌市に住んでいながら、なかなか行く機会がありませんでした。ウオッチングガイドで今日の探鳥会の事を知り、参加する日を楽しみに待っていました。

鳥の事はあまり知りませんが、一緒に歩いて説明して下さった人の話に耳を傾けながら、今日は出来るだけ鳥の姿を見、鳴き声を聞こうと張り切って歩きました。参加された人達は、何年も探鳥会に来ているので、鳥を見たら足を止め、その鳴き声を確かめるかのように、そっと静かに、そして耳に神経を集中する。その様子を見ながら、“さすがだなあ”と感心するばかりでした。正直なところ、鳥の事はほとんどわかりませんが、私にとっては、太陽のもとで、道端に咲いている小さな花を見、木々を見上げ、その枝先を飛びまわる小鳥を捜しているなんて、とても倅わせな心休まるひとときです。食事が終わって少し休んだあとで、今日出逢えた鳥をみんなで確認しました。私が見つかる事が出来た鳥たちは、5～6種類でしたが、参加された皆さんは30種類近くも見つけたんです。

少しでも鳥の声を理解する為にも、探鳥会はこれからも参加出来る様努力しようと思います。

今日はとても楽しい一日でした。ありがとうございました。
〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条16丁目7-16

【記録された鳥】トビ、マガモ、キジバト、ヤマセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、クロツグミ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 29種

【参加者】須田 節、高栗 勇、村田静穂、今泉秀吉、渡辺吉守・好子、樋口孝城・陽子、勝見輝夫・真知子、戸津高保・以知子、松原寛直・敏子、高宮まゆみ、田子元樹、大西典子、山田良造、佐々木 裕、蒲澤鉄太郎、吉田慶子、佐々木充人、小堀煌治、長谷川嘉子、板田孝弘、小松ネネ、品川睦生、犬飼 弘、鎌田玲子、横山加奈子、岩崎孝博、山口和夫、後藤義民、日枝幸子、大沼博之・三智子、井上公雄

以上 37名

【担当幹事】=小堀煌治、井上公雄

千歳川早朝探鳥会

2001. 5. 13 斉 藤 由美子

朝5時、まだ少し眠い目をこすりながら車を出た瞬間、

鳥達の声の大きいこと、多いことにびっくり。これは寝ぼけていられない！

そして今度は「ヤマセミだ。」の声。大変！早く準備しないと……。早朝にもかかわらず参加者が多いのに驚いたが、間もなく、早くからこれだけの人が集まる訳が理解できた。

まだ1人では声も聞き分けられなければ姿もろくに追えない。肉眼ではあの枝とと思ってても双眼鏡に入らない。みんなが「わーきれい。」と感動しているなか、私も見たい！とあせればあせる程探せない。そのうち「あーいっちゃった。」の声。がっくり。

あそこあそこ、あの枝。どうしてわからないの？と周りには思うでしょうが本人は必死。何せ相手は待ってくれないし。とんでもない方向に双眼鏡を向けては、連れに頭ごとつかまれ、動かされる始末。

自然は不思議。こちらが見ようとしなければ何も見えない。気づかない。でも、見よう関わろうという気持ちがある者にはいくらでも感動を与えてくれる。日々のお出勤途中では、公園で囀る鳥の声にさえ気づかないこともある。

今回、私にとっては初めてのオオルリとの出会いだだったので、あの美しい姿には人一倍うっとり、感動。ずっと見ていたい。そして、また会いたいと心から思った。歩き始めて間もなくオオルリに出会ったけれど、以前から見たかった瑠璃色ではない。どきどきして双眼鏡を覗いたのに白いお腹……。あれ？瑠璃色でしょ？という思いから、見れた！と喜びたいけれど、どうも納得できない。しばらく行くとまたオオルリの声、今度こそと思いきやまたほぼ真っ正面。キビタキやノゴマだと真っ正面はうれしいけれど。そして3度目、初めてあの何とも言えぬ美しい姿を確認できたときは本当にうれしかった。スコープでのアップで感動もさらに倍増。

普段は食気最優先の私が「食べなくていいからもっと見ていたいな。」と言ったのだから、本人は勿論いつも一緒の連れが「え？」と耳を疑うもの当然。

観察会のあと芝生で少し昼寝をし、マウンテンバイクで林道を通り再び山へ。朝方ご飯を食べた向かいの側の崖の上まで行ったところで折り返した。朝よりはずいぶん鳴き声は減っていたものの、ウグイス、イカル等に会えた。楽しかった。

最後に、お世話頂いた井上さん、栗林さん、そしてスコープで鳥を間近に見せて下さった皆さん、なかなか見つけられない私に横で何度も居場所を教えて下さった皆さん、ご一緒させて頂き本当にありがとうございました。

声を聞いてその持ち主を見つけることが出来るまで、また何度でも出掛けようと思っています。

〒007-0846 札幌市東区北46条東2丁目1-6

【記録された鳥】アオサギ、トビ、ツミ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、クロツグミ、アカハラ、ツグ

ミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニューナイスズメ、ハシボソガラス 以上 40種

【参加者】鈴木邦夫・美紀子・紅・度・花、今村三枝子、山口和夫、今村浩史、内田 孝、中馬秀普、佐藤佳代子、北村 覚、登野泰信、栗林宏三、板田孝弘、斉藤由美子、

島田芳郎・陽子、戸津高保・以知子、鈴木繁雄・英子、木村与吉・弘子、蒲澤鉄太郎・則子、川東保憲・知子、山田良造、沢田浩一、高橋利道、小山久一、鷺田善幸、佐藤富夫、吉田慶子、岩崎孝博、広木朋子、沢部 勝、高栗 勇、品川睦生、渡辺好子、中村 聡、川村宣子、井上公雄

以上 44名

【担当幹事】=井上公雄、栗林宏三



【鶴 川】2001年8月19日(日)
9月2日(日)

この時期には、もうすでにシベリア北東部の高緯度の地で繁殖を終え、越冬のため南へ渡りはじめているコチドリ、メダイチドリ、ダイゼン、チュウシャクシギ、キ

アシシギなどのシギ・チドリ類が、この鶴川の河口でも羽を休めています。近年、河口付近の海岸線の浸食が進み、干潟や湿地が減少し、シギ・チドリ類の渡来数も減少傾向にあります。チュウヒやオオタカも度々現れ、冬羽に衣替えたノビタキ、オオジュリン、時にはアジサシ、カワセミが見られることもあります。

集 合=JR日高線鶴川駅前 午前9時30分

【野幌森林公園を歩きましょう】

2001年7月8日(日)、2001年9月9日(日)

集 合=大沢口駐車場入口 午前9時

交 通=夕鉄バス(文京台線)

新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」

大沢口公園下車 徒歩5分

☆観察用具、図鑑筆記具、昼食雨具などをご持参下さい。

☆交通機関をご利用の方は、各自でお確かめ下さい。

☆いずれの探鳥会も、余程の悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは、

011-563-5158 白澤宅へ

鳥民だより

写真展出品目録

山田 良造 「シマフクロウ、クマガラ」
渋谷 信六 「フクロウ、ショウドウツバメ」
鈴木 正之 「アオバズク、ハクガン・ヒシクイ」
佐藤 勇 「キビタキ、シメ」
志田 博明 「ハチジョウツグミ」

佐藤ひろみ 「ホオアカ、シロハヤブサ」
小堀 煌治 「アメリカコハクチョウ、カワアイサ」
新城 久 「マガン、チュウヒ」
高橋 良直 「ハヤブサ、アネハヅル」
片山 實 「ハヤブサ、バンケン(特別展示)」
田向 一彦 「タンチョウ (2枚)」
川上 秀幸 「タンチョウ (2枚)」

以上 12名、23点

☆☆☆会 員 名 簿☆☆☆

【新しく会員になられた方】

嘉藤 慎譲 〒001-0017
札幌市北区北17条西5丁目20-303
地域環境計画内
橋爪 陽子 〒003-0022
札幌市白石区南郷通12丁目南6-37
安念 嘉郎 〒004-0022
札幌市厚別区厚別東4条4丁目
瑛子
小山 久一 〒004-0022
札幌市厚別区厚別南6丁目
田宮ひろ子 〒004-0051
札幌市厚別区厚別中央1条5丁目1-22-1103
小林 紀子 〒005-0823
札幌市南区南沢3条1丁目3-20
中村 聡 〒004-0022
札幌市厚別区厚別南2丁目11-26
パークノウラひばりが丘302
川東 知子 〒004-0878
札幌市清田区平岡8条4丁目5-17
島田 芳郎 〒002-8072
陽子 札幌市北区あいの里2条6丁目3-3-806
さやか
あすか
川村 宣子 〒004-0012
札幌市厚別区もみじ台南4丁目2-6-303

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465